学長インタビュー No.18

夢は、みんなのための財団設立と日本一の教養教育

日時　平成八年八月二日(金)
場所　学長室

夏休みに入ったある日、東千田の学長室を訪ねて、財団設立や教養的教育をめぐる状況などについて質問した。聞き手は岡本、越智の両広報委員。

広報委員＝七月三十一日に「財団法人広島大学後援会」設立のための発起人会が開かれたと聞きました。懸案の財団ですが、学長としてどのような感慨をお持ちでしょうか。

学長＝ようやく発起人会までこぎつけた。これは佐竹覚氏を代表とする四十二名による構成だが、今後この組織を核として財団を設立申請することになる。財団設立は、かねてから本学の構成員みんなの念願であっただけに、実現できることは私の大きな喜びだ。これで広大の教育・研究活動を支援するための実質的な母体ができあがるわけだ。

これを使って、研究助成や国際交流支援、さらには講演会、シンポジウム、セミナー開催に対する補助が可能になるし、とりわけこれまで難しかった職員の海外研修などへも援助できることになる。学生、教員、職員「みんなの財団」が早く実現できるよう頑張りたい。

この発起人会で感銘を受けたことがある。大学は日本の将来を担う優秀な人材をつくる場所だから、これを支援することは「企業として」も「一市民として」も「社会的な義務」だと、佐竹氏が語られたことだ。本学には、こうした学外の熱い声に応えていかなければならない使命があると思う。そのためにも、いつも言っていることだが、学内の構成員の意識改革がぜひとも必要だ。広島大学は学部の集合ではなく、一つの大学だという意識だ。これなくして本学の発展はない。一致団結してよりよい大学を目指すという意識がなければ、新しい大学の姿が実現できるはずがない。

これは、本学に集うわれわれ自身に関わるだけではなく、将来の本学の構成員すべてに関わっている。新しい大学を創らなければ、学生の進路すら開かれない時代が間もなくやってこよう。何もしないでも大学はやっていけるなどと思ってはならない。新しい大学が実りあるものになるためには、いま大学人が一つの意識のもとで協力しあう必要がある。

私はこの広島大学後援会と同窓会連合が両輪となって、やがて迎える五十周年事業が盛大に開催される日を楽しみにしている。前者も後者も、大学改革の貴重な成果だ。これらとともに、現在進行中の教育改革が実を結べば、広島大学は、日本一の大学になるはずだ。これがずっと私が夢見ている広大の姿なのだ。

広報委員＝平成九年度から開設される新教養的教育の検討が大詰めに来ています。これから行われる教養的教育の目標、特色などをお聞かせください。

学長＝今は「ほっておいても学生が売れる」時代ではなくなっている。私は学生の〝出口〟について真剣に考えている。日本だけではなく、世界にその頭脳で出ていけるような人材を育てる教育を考えている。

この点からも教養的教育は大切で、社会に出てから学ぶことも多く、学部教育はバランスの良い教養人を育てることが大切だと思う。

本学には、総合科学部という全国の国立大学の中でも数校しかない教養的教育を担当している学部があるのだから、この利点を活かしながら全学をあげて教養的教育を実施したい。

私は、一連の教育改革の中で「総合科学部のルネッサンス」ということを提唱している。科学を総合的に教えるということで広大の看板学部になっている総合科学部の創設の精神を思い起こしてほしい。

新教養的教育の具体的な特色は、前号で述べた使える語学と情報科目、パッケージ科目、教養ゼミなどの科目の創設にある。教養ゼミでは、十人単位の小人数教育により、教官にとっても教育の意義を見直す機会となるであろう。

とにかく実施に移し実行するなかで改善を図りたい。副学長制が導入されれば、そのうちの一人に教養的教育を含む学部教育の精選・充実にご尽力していただき、計画段階ですでに評価を得ているこの教養的教育を推進していきたい。